



盲目のヴァイオリニスト、和波孝禧を支えた母の記録

# いのちのシンフォニー

和波孝禧の子 著

盲目のヴァイオリニスト、  
和波孝禧を支えた母の記録

# いのちのシンフォニー

和波その子 著



## 著者紹介

大正8年仙台市生まれ。昭和11年東京府立第五高女（現都立富士高校）卒業。昭和18年、和波忠一郎氏と結婚し、長男孝禧、次男幸久の母となり、主婦として現在に至る。昭和51年孝禧氏をヴァイオリニストとして育て上げた手記『母と子のシンフォニー』を音楽之友社から公刊し、好評を博している。

## いのちのシンフォニー

盲目のヴァイオリニスト、  
和波孝禧を支えた母の記録

昭和五十六年十一月二十日 第一刷発行

定価一四〇〇円

◎著者 和波その子  
発行者 浅香 淳

東京都新宿区神楽坂六の三〇  
発行所 株式会社 音楽之友社

電話(二六八)六一五一(代)

営業部(二〇二)四二九一(代)

振替東京七一九六二五〇

郵便番号 一六一

大永舎印刷／豊文社製本

## 目次

I	国際電話《プロローグ》	7
II	アメリカ演奏旅行	16
III	ヨーロッパへ	41
IV	海のむこうの恩師	95
V	ベルリン、ロンドンの初舞台	146

VI 可能性を求めて

202

VII 出会いと別れ

229

VIII おそいかかる癌の恐怖

250

IX 親子三人の旅

278

X 祈りよ、とどけ

293

付記 和波孝禧

324



いのちのシンフォニー





# I 国際電話《プロローグ》

## 予感

そうだ、やっぱりあれが始まりだったのだ。ヴァイル・アム・ラインでコンチェルトのコンサートの中、弓の故障のため演奏を中止しなくてはならなくなった。あれはやっぱり重大なことの知らせだったのだ。

それは昭和四十九年五月一日、ライン河畔の音楽会の後半、孝禧のソロでパツハのヴァイオリン協奏曲第二番、第一楽章が演奏されていた。座席にいた私は、ソロの音が聞こえなくなったと思つた瞬間、孝禧の持つ弓の毛がだらりと垂れているのをみとめ、何事が起きたかを確かめるとまもなく、すぐさま席を立ててホールの外にとび出していった。とにかく弓が駄目になって弾けなくなつた。楽屋にある予備の弓を渡さねばならぬ。気は焦るが、つるつるの大理石ふうの床を滑って転んでは——とすり足で走りつつ楽屋に降り、弓を持って舞台袖に向かった。ちょうど孝禧は指揮者と腕をくんで袖に入って来たところだった。「はい、これ」「あ、どうも」

短い言葉のやりとりで二人は弓を交換し、孝禧は新しい弓を右手にしっかり持ってニコッとする

と、「アデッソ プロント」と指揮者に告げてすぐ舞台に戻った。

演奏は曲の始めから再開され、お客さまはそれほど待たされたことにはならなかった。演奏は無事終わり、満員の聴衆の力強い拍手、はては足を踏み鳴らしつつアンコールを要求する拍手が続いた。大成功であった。この方面の主催者であり、オーケストラを組織して自ら指揮をされるシャウフラー氏もご満悦であった。

でも私はさっきの驚きがズシリと胸の中に沈んでいるのを感じていた。今まで何回となく演奏会を行って来て、弓がこんな壊れ方をしたことはない。何かの悪い知らせではないか——と思われてならなかった。今年の旅行は例年になく、日本をあとにして以来よくないことに出席していた。海外で最も頼りにさせて頂き、敬愛していたロレンツイ先生の突然の訃報を、最初の地ロンドンで聞かなければならなかった。その後も東ベルリンで予定されていたピアニストが交通事故に遭い、急に代わった人との共演に思わぬ苦勞をした。その揚句に——である。

成功を祝って仲間たちの賑やかな会食の内、ふと孝禧も同じことをいった。「ね、うちに電話してみない？ パパかユキが大丈夫だろうか」。私はスイスに着いてすぐ受け取った主人からの手紙に、検査のため入った病院で貧血が発見され、その原因を探索中だと書いてあったのが気にかかっていた。

翌日昼前、東京の日暮れ時を狙って尾山台の電話を呼んだ。検査入院からはもう帰って来ているはずだし、会社へ出ても帰宅する頃だと思ったのだが、電話のベルはむなしく鳴りつづけるばかり、受話器のとりあげられる気配はなかった。どこか回り道したのかと翌朝に当る時間に再びわが

家の番号を呼び出したが、依然として応答なし。「やっぱり何か変わったことが——」と心配は募るばかりだが、次の日はチューリヒへ移動しなくてはならず気にかかりつつ夜となった。こんどは結婚後、別居している次男幸久の出勤前にと、そのアパートに電話をした。「パパがね、手術するこ  
とになったんだ。貧血の原因は腸だったんだって。腸になにかできているから早くとったほうがいいと、先生方がいわれて——」。それでずっと病院にいたのだという。幸久の声は落ち着いていて病状の説明をしてくれたが、私は予感の適中におびえていた。七年前に胆石で開腹手術をし、三年前には心筋硬塞を患ったりしながら、会社の重要な役目を果たしていた主人だが、いままた腹部の手術をしなくてはならないという。

「私が帰ってからでいいんでしょう」「ママいなくても大丈夫だから、なるべく早く手術してしまおうといってるよ」。そんなに急がねばならぬほど悪いものかと、心配で身体中がしめつけられるようだったが、留守中にやってみてもよいほど簡単なものかと、逆を願う気持もあった。

翌日午前中は、当地チューリヒのオーケストラとチャイコフスキーの協奏曲を弾くための第一回のリハーサルを済ませてホテルに戻り、東京のわれわれのホームドクターであり、親戚であり、虎の門病院産科に勤める雅子先生の家に電話した。当直でない限り必ず家におられる、夜十時頃を見計ってかけた。「筑紫先生も池永先生も石見先生もみんなでご相談して下さったけど、たいした手術ではないし早いほうがよいから、奥さんの留守でもやってみようといわれて、叔父さんもその気になっていますよ。手術馴れしているから大丈夫でしょう、私もよく気をつけますから」雅子さんは私の気持を見越してよく説明してくれる。腸の下向結腸の下部にポリープがあり、いまはごく

小さいが放っておくと腸閉塞になったり、腸痛になったりする危険がある。見つけ次第とってしまふべきものである。主人の既往症にもくわしい、それぞれの科の先生方が引き受けるといっておられるようだ。「心配しないで。その子さん帰って来る頃は叔父さん元気になっていきますよ」と明るい声だ。

——そういうことなら、病院におまかせするより方法はない。主人も納得しているという。家には、主人の両親とともに、主人の妹が彼女の夫の戦死以来同居しているので、いざとなれば付添いも頼めるかという気もした。それにしても、主人の身の大事な時に傍にいられない無念さが胸をしめつけた。そうかといってまだ孝禧の演奏会が残っていて、ヨーロッパを引き揚げるわけには行かない。「なんとということー」私はこうなった運命を嘆いた。先生方が大丈夫とおっしゃっても私は傍にいたいのだ。見守っていたいのだ。主人はきっと私に頼みたいことがあるに違いない。

開腹手術は無事に済み、その後の経過もよく、術後最低の三週間で退院と決まった日、私と孝禧も羽田に着いた。六月七日、はや東京は夏の暑さだった。孝禧と荷物を家に送り込むとすぐ私は病院に向かった。外科病棟の四階のエレベーターの前で待っていた主人は、私の想像以上にげっそりとやせていて、私はドキッとした。でも危険な峠を越えた主人との再会の喜びがあった。体力を回復してもらうため、私は何でもしよう——それをあれこれ考えて、自分の旅の疲れは忘れてしまっていた。

——それは、一見無事に経過したかに見えた。しかしやっぱり私は後悔しなくてはならなかった

のだ。手術の予後を見守っているべきであった。とりかえしのつかぬことはこの時始まっていたのだ。たった。

(Ⅶ章からの〈ダ・カーポ〉終わり)

主人と次男に心を残しつつ孝禧と海外を旅行するようになって、もう何年だろう。孝禧の音楽的生命は、日本以外の国へも伸びて行こうとしていた。初めて日本から出たのは昭和三十九年、孝禧の在籍していた桐朋学園弦楽合奏団の渡米の際であった。孝禧はメンバーの一員として、私は同行を要請されて加わったのである。

### 桐朋学園大学へ

桐朋学園大学音楽学部にて、全課目の入学試験を受け入学を許可されたのは三十八年の春である。"弦楽科の生徒はオーケストラのメンバーとなり、必ず練習に出ること。室内楽もやりなさい。毎年夏には合宿があるがそれにも加わること"と申し渡して下さったのは、創立以来桐朋学園のオーケストラをわが子いやわが身のごとく愛し育てられ、そのオーケストラにより桐朋の名を高くしている斎藤秀雄先生である。"特別扱いはしないぞ"との宣言であるが、私には孝禧の演奏力を認め、私らの努力を信じて下さる深い暖かいお心が感じられて心底嬉しかった。

そう、孝禧はそれがやりたかったのだ。視力のあるなしを越えて、友だちと一緒にひとつの音楽を作るのはどんなに素晴らしいことだろう。さまざまの経験が積めるし、また友人もふえて孝禧の

世界が大きく拡がるであらう。障害を慮って、勞られて、疎外されるほど悲しいことはない。

オーケストラの最初の練習の日は、さすが緊張してその練習予定の曲、ベートーヴェンの「エロイカ」の第一楽章を、孝禧は全部暗譜して臨んだ。Aオケの第一ヴァイオリンの一番うしろのプルートの席である。始まってみるとタクトの動きも感じられるし、周りの人の様子で分かるので音を出すのがそんなに怖くないようだ。「カンがいいから大丈夫ですね」と、ひそかに案じておられたらしい齋藤先生もにこにこしながらそう言って下さった。

その後先生も信用して「何遍も練習するんだから、最初から弾けなくてもいいですよ」といって下さり、孝禧も味をしめて、私が点譜を作ったのを分奏の時に読みながら聞いていると覚えやすく随分能率も上り、毎週のオーケストラの練習日を楽しみに通っていた。

実技の他、学科では語学や音楽史など黒板を沢山使われるので筆記する必要がある、私もともに出席することが多かった。音楽理論や対位法は、孝禧の点字で書いたものを五線譜になおすのである。

朝学校へ着くと、会う友だちが元気に声をかけてくれる、

「ワナミ君おはよう」

「おはよう」と孝禧も元気に答えるが、小さい声で私に聞く、「いまの誰？」

私は顔は覚えても、名前を覚えぬ天才だから、その時本当に困ってしまう。

「声楽科で坂川先生の英語で一緒の方」とか、「管楽器科でソルフエージュの時おもしろい声を出した方」とか説明にひまがかかる。すぐお名前の出て来るのは、ヴァイオリン科の他はごく限られ

た方々である。「こんにちわワナミ君、名倉です」、声をかけて、必ず自分の名前を告げる人が、この名倉さんの他数人あって、そうすると孝禧はすぐ生き生きと応対できて、とても嬉しそうだ。

これまでの盲学校は十二、三人のクラスで中学も高校も同じ顔ぶれで三年ずつを過ごして来た。それが急に大勢の中に入って、しかも自分以外は全部目の見える人である。それは四月の末だったが、帰りぎわに、三階の廊下に置いたものを「ひとりで取りに行く」と歩き出した姿に私は孝禧の悲しみを見た。足をすり気味に、手で伝いながら歩く姿は、盲学校では見馴れたものであったが、ここでは全く特異なものだ。かわいそうにと思いたくなる。でも離れてかわいそうがっている私ではいけない。私は孝禧の側に立ち、孝禧の心に密着して呼吸しなくてはならない――。

六月に入って、桐朋弦楽合奏団を組織し、来夏アメリカ演奏旅行を行うことが発表になった。その選抜試験は七月二日にA Bの区別なく受けられるという。

その試験のあと間もなく、私は斎藤先生のお部屋に呼ばれた。オーケストラの事務局の伊集院先生も同席しておられた。「われわれは和波君を渡米の団員として連れて行きたいが、メンバーは皆それぞれ役目があって、とても和波君の世話はできない。お母さん一緒に行って下さいませんか」との言葉だった。孝禧が行くのと行かぬのと、オーケストラのためにどちらがよろしいのですかと伺ったところ、「行ってくれたほうがよい」とのこと。ただし私の分まで費用は出ないから、自弁で同行してほしいといわれる。主人と相談してご返事することにしたが、主人は孝禧が外国を見聞する絶好のチャンスだから、私も「行ってこいよ」という。費用も「何とかしよう」とのこ



と。それで話は決まった。次男の幸久も留守番をしてくれるという。

僻地を走っていた列車が、大都会に近づくように、山村の谷あいを流れていた川が、広々とした大河になるように、それは自然の流れだったのだが、ふと気がついて私は、自分の立場にびっくりした。孝禧に必要なものを身につけさせるため、夢中で次から次へとやって来たのが、いま外国まで行くことになったのだから――。

渡米の曲目も日程も決まり、練習はまさに特訓の形となった。夏休みの合宿のあと、さらに後期の授業の始まるまで、暑い中を学校で集中練習が続いた。傍ら秋になると孝禧は東京労音の三夜連続のコンサートがあったり、地方の演奏旅行もあり、学校で必要な点字楽譜の製作とともに私の仕事もふえる一方で、当時の日記をいま読んでも目が回るようである。

秋にはもうひとつ大事な孝禧の舞台が与えられた。日本フィルの定期演奏会のソロイストとして斎藤先生の指揮でグラズーノフの協奏曲を弾くこととなったのだ。先生は慎重にリハーサルを重ね「指揮者の苦勞したコンサートほど出来がいいんだよ」といわれ、孝禧の持ち味を充分ひき出そうと努力して下さった。『ついに僕が日本楽壇に登場する日が来た。意義の大きさ、責任の重さを感じつつも、充分眠ってさわやかな朝を迎えた』と孝禧は当日のメモに書いている。東京文化会館大ホールの本番を無事弾き終えると大拍手が湧き上った。江藤先生も驚見先生も聞きにいらしてほめて頂けたし、幸せなデビューであった。

のち音楽新聞に「心を打つ清純なひびき」と題して菅野氏の好評が載り、音楽芸術誌には上野見氏が「しなやかで大らかなリリズムを豊かに歌い上げた」と書いて下さったが、いずれもこれか